

## 幼稚園実習における健康教育を通じた学生の学び

古屋肇子 佐藤寿哲 野村幸子

大阪青山大学健康科学部看護学科

Health education for Kindergarten Children by Nursing Students  
— Focusing on Understanding of Development of Nursing Students —

Hatsuko FURUYA Toshiaki SATO Sachiko NOMURA  
School of Nursing , Faculty of Health Science , Osaka Aoyama University

### Abstract

As part of their pediatric nurse practical training, students conducted health education for kindergarteners at a kindergarten. After the training, students and kindergarten teachers completed a questionnaire on health education. The overall recovery rate for the questionnaire was 84%. There was a large significant difference between the awareness of the students and that of the kindergarten teachers, particularly regarding three survey items on their understanding of educational methods suitable for the children's development. The students could obtain a real understanding of the importance of recognizing and supporting individuality of each child based on interactions with that child. This suggests the need to devise teaching methods and instructional arrangements to improve students' understanding of the children.

**key words** : kindergarten practice, health education, nursing students

キーワード : 幼稚園実習、健康教育、看護学生

### I. 緒言

小児看護は、あらゆる健康レベルの子どもとその家族を対象としている。看護者は、子どもが成長発達に伴いセルフケア能力を発達させ、自ら健康問題に取り組んでいくことができるように支援していくことを目的としている。現代の小児医療は、少子化に伴い、小児科の縮小や閉鎖、入院期間の短縮とともに、技術の進化による疾病を抱える子どもの治療

の複雑化や疾病の重症化など変化してきている。また、病院中心の疾病治療から地域中心の疾病予防・健康増進へと医療の重点が変化しており、子どもと家族への看護は、小児病棟に限らず様々な場で展開されている<sup>1)</sup>。

このような社会構造の変化により、小児の病院実習場所や日数の確保が困難であるとともに、まず健

康な子どもへの理解を目的として保育所や幼稚園などの施設実習を取り入れる看護師養成系学校は多い<sup>2)</sup>。

小児の病院実習とは、子どもとの関わりの経験が少ない現代の学生にとって、「子どもに接することすら心配なのに病児となるとどうしていいかわからない」「病院にいただけでもストレスを感じていたり我慢したり、そういう子に対してどうしてあげたら和らげられるのか」など、受け持ち患児に対し困難感を感じさせている<sup>3)</sup>。疾病により入院している子どもは、点滴治療や疼痛などにより健康な時に出来ていた排泄、食事、更衣などの日常生活動作が一人でできなくなる。倦怠感が強くぐったりして寝ている状態であれば、コミュニケーションも取れず生活年齢よりも発達が遅れているように感じるものがしばしばある。教科書での学習だけでは、子どもが「わからない」ことからくる不安や困難感を学生が持つことは当然のことである。90時間という短い実習を病院に特化して行うことで、本来の子どもの姿を理解する経験ができなまま、子どもとの関わりに困難感を感じ、発達のアセスメントが不十分になることで発達を促すようなディベロップメンタルケアに基づいた働きかけを学びにくい状況となる可能性がある。従って、小児看護学実習では、フィールド構成や内容を工夫し、実習という体験学習によって、学生が子どもを「わかる」学びを得ることができるように検討していくことが必要である。

本学看護学科3年生後期に行われる小児看護学実習は、幼稚園と病院の実習から構成され、合わせて2単位2週間行われる。実習の目的は、幼児期にある小児の成長発達を理解し、発達に応じた関わりや、疾病の予防、健康を高める支援の方法を学ぶこと、健康障害を持つ子どもとその家族に対し、健康レベルに応じた看護を実践するための基本的知識、技術、態度を習得することである。幼稚園実習では、学生が各クラスに入り、設定保育や自由保育の中で子ども達と関わるとともに、初年度に疾病を予防し、健康を高める支援方法の一つとして、健康教育を園児に行った。

幼児期の健康教育の必要性について、母子の健康水準を向上させるための様々な取組を行っている健やか親子<sup>21)</sup>では、学童期・思春期から成人期にむけた保健対策を重点課題として行っている。食生活はもとより清潔、運動などの生活習慣は、成人後の健康に大きく影響する。子ども達の健康格差を是正

し、子どもが主体的に健康づくりに取り組むためには、幼児期からの健康教育を幼稚園や保育園で行うことが求められている。文部科学省「幼稚園教育要領解説」<sup>5)</sup>の第2節各領域に示す事項1心身の健康に関する領域「健康」によると、幼稚園の健康に関する学びのねらいは、(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付けるとされている。換言すると、安全な環境の下で十分に身体を動かすことで健康な心を育てるとともに、自分の体を大切にし、身の回りを清潔で安全なものにするなどの生活に必要な習慣や態度を、幼稚園生活の自然な流れの中で身に付けていくようにすることが重要であると位置付けられている。

幼稚園や保育園でどのような健康教育が行われているかを調査した研究では、健康教育を行っていない施設は数%であり、多くの施設で取り組まれている。内容は虫歯予防、栄養、清潔や感染予防で約60%を占めている。その他ケガや事故防止、衣類、命についてなどが挙げられている。健康教育と言っても内容は多岐にわたっていることが伺える。健康教育を行っている人は69%が担任、主任、園長であり、その他調理員、看護師、栄養士などで、外部からの講師が4%となっている。<sup>6)</sup>

学生による幼児への健康教育では、子ども教育学科の学生<sup>7)</sup>や看護学生<sup>8) 9) 10)</sup>の実践が報告されている。看護学生の健康教育では、手洗い、うがい、歯磨き、熱中症予防、交通安全、好き嫌いをなくそう、自分のからだを知ろうなどが行われている。

本研究では、学生が主体となって、園児に健康教育の立案・実施後、アンケート調査によって学生と幼稚園教諭による健康教育への意識の差を検定により検討した。また、アンケート調査および実習記録内容の自由記述から、幼稚園実習の健康教育による学生の学びについて考察したことを報告する。

## II. 方法

### 1. 幼稚園実習における内容

#### 1) 実習目標 (大項目)

- (1) 幼児に関わるものとしてふさわしい態度
- (2) 幼児の成長発達の特徴を理解し、必要時成長発達に応じた支援をすることができる。

- (3) 子どもとの関わり方（コミュニケーション技術）を理解し、実践できる。
- (4) 幼稚園における安全管理、安全教育について理解し、必要時実施できる。
- (5) 幼児を取り巻く環境が理解できる。
- (6) 健康教育の必要性を理解し、可能なら計画、実施できる。

## 2) 学生のグループ構成

実習学生 78 名は 17 グループ（G）に分かれて実習を行い、1G（4～5 名）で 1 つの健康教育を希望または園の指定の年齢のクラスに行った。

なお、幼稚園の行事や日程の都合上行えなかった学生は対象外とする。

## 3) 方法

幼稚園実習初日に大学内において、幼稚園実習オリエンテーションを行うとともに、園児に健康に関心を持ってもらうことを目的に健康教育の企画および準備を行った。その際、教員から方法や注意事項について簡単に説明を行った。学生は、グループで 1 つの企画書を作成し、脚本をもとに画用紙等とするものを工作後、本番を想定し練習を行い、必要時助言した。発表当日は、準備した内容に合った年齢の 1～3 クラス（約 60～90 名）の子どもを対象に、教室で 10～15 分の健康教育を行った（表 1）。幼稚園教諭の数名にも園児側で見学してもらった。

## 4) 幼稚園実習事後の振り返り

健康教育企画書の下段に、学生は各自振り返りを記入するとともに、面談において口述するように求めた。その上で、全員の幼稚園実習終了後、アンケート調査（表 1）を行った。

## 2. 調査概要

### 1) 目的

学生と幼稚園教諭へ健康教育についての意識に関するアンケート調査を行い、健康教育からの学生の学びについて検討した。

### 2) 対象

小児看護学実習の幼稚園実習で健康教育を行った看護学科 3 年生 46 名および実習先幼稚園教諭 18 名。

## 3) 調査期間

2018 年 2 月

## 4) 方法

学生には、小児看護実習終了後の授業の休憩時間を利用し、アンケート調査用紙を配布した。学生は無記名で回答後封筒に入れ糊付けし、大学内に設置した回収箱に投函してもらうよう紙面で説明した。実習幼稚園教諭には、幼稚園責任者に説明を行い、各教諭に無記名で回答後封筒に入れ糊付けし、回収してもらうよう依頼した。

## 5) 質問紙内容

健康教育の内容についての 11 項目と、その他健康教育に関する意識についての 4 項目を「違う」「やや違う」「ややそうだ」「そうだ」の 4 件法で回答を求めた。また、学生には健康教育の課題や学びについて、幼稚園教諭には同じく健康教育の課題や大切にして欲しいことおよび希望について自由記述での回答を求めた。

## 6) 倫理的配慮

アンケートは無記名であること、自由意思で回答の有無を決定できること、個人を特定できないよう配慮し、研究・発表に使用することをフェイスシートで説明した。また、成績には影響しないことを説明した上で、回答の同意を「はい」または「いいえ」に丸を付けることにより求めた。また、本研究は、大阪青山大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得ている。

## 7) 分析方法

自由記述以外の 15 項目は、4 件法で求めた回答をわかりやすいように「違う」「やや違う」を「いいえ」、「そう」「ややそう」を「はい」の 2 つにまとめて集計し、割合を算出した。そのうち学生と幼稚園教諭の質問内容が一致する 11 項目については、4 件法の回答「違う」「やや違う」「ややそう」「そう」のまま 1～4 点と点数化し、Mann-Whitney の U 検定により学生と幼稚園教諭の意識の差の検定を行った。自由記述についてはカテゴリー化を行い、主な内容を表にまとめた。

表1 初年度幼稚園実習 健康教育一覧

学生人数	内容	方法	対象
1 5名	手洗い方法	画用紙に手の写真を印刷	年長組
2 4名	歯の生え変わり時期の虫歯予防	並んでいる歯を印刷した用紙・歯ブラシ・クイズ	年中組
3 4名	いいうんちをするためにバランスの良い食事の大切さ	お腹の中を書いた模造紙	年中組
4 5名	食事の大切さの意識づけ	紙芝居	年少組
5 5名	風邪予防の意識づけ	手遊び・劇・ペープサート	年少組
6 4名	ケガをした後治るまでのメカニズムの理解と安全に遊ぶ	フルート演奏と劇・紙芝居・お面	年長組
7 4名	手洗いうがいの必要性の理解と方法	手遊び・絵・クイズ・ジェスチャー	年中組
8 5名	骨を丈夫にするために生活で気を付けること	紙芝居とクイズ	年長組
9 5名	手洗いの意識づけ	きらきら星の手洗いの替え歌 メダルプレゼント	年少組
10 5名	手洗いのタイミングを知る	画用紙に描いた絵	年中組

表2 学生の健康教育の内容の回答割合

質問項目	はい	いいえ
1. テーマは健康教育の目的や目標に合っていましたか	97.3 (36)	2.7 (1)
2. 健康教育の内容は、対象の子ども達の発達に合ったものでしたか	94.6 (35)	5.4 (2)
3. 使った道具で子ども達の興味をとらえられていましたか	94.4 (34)	5.6 (2)
4. 時間の長さは適切でしたか	91.9 (34)	8.1 (3)
5. 子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できましたか	86.5 (32)	13.5 (5)
6. 声の大きさや速さは適切でしたか	94.6 (35)	5.4 (2)
7. 安全面で問題はなかったですか	100 (37)	0 (0)
8. 子ども達は集中して聞いていましたか	94.4 (34)	5.6 (2)
9. 伝えたい内容は焦点化でき、子ども達に伝わりましたか	91.7 (33)	8.3 (3)
13. グループメンバーと協力して行えましたか	94.6 (35)	5.4 (2)

※「はい」は「そう」と「ややそう」、「いいえ」は「違う」「やや違う」%(人数)

表3 幼稚園教諭の健康教育の内容の回答割合

質問項目	はい	いいえ
1. テーマは健康教育の目的や目標に合っていましたか	94.1 (16)	5.9 (1)
2. 健康教育の内容は、対象の子ども達の発達に合ったものでしたか	66.7 (12)	33.3 (6)
3. 使った道具で子ども達の興味をとらえられていましたか	77.8 (14)	22.2 (4)
4. 時間の長さは適切でしたか	88.9 (16)	11.1 (2)
5. 子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できましたか	41.2 (7)	58.8 (10)
6. 声の大きさや速さは適切でしたか	77.8 (14)	22.2 (4)
7. 安全面で問題はなかったですか	100 (18)	0 (0)
8. 子ども達は集中して聞いていましたか	88.9 (16)	11.1 (2)
9. 伝えたい内容は焦点化でき、子ども達に伝わりましたか	72.2 (13)	27.8 (5)
11. 学生はグループメンバーと協力して行えていましたか	73.3 (11)	26.7 (4)
12. 今後も幼稚園実習で健康教育を続けた方がよいと思いますか	73.3 (11)	26.7 (4)

※「はい」は「そう」と「ややそう」、「いいえ」は「違う」「やや違う」%(人数)

表4 学生と幼稚園教諭の健康教育の内容の比較

質問項目	平均ランク		検定量U	検定量Z	有意確率
	学生	幼稚園教諭			
1. テーマは健康教育の目的や目標に合っていましたか	28.81	24.65	266.00	-1.07	.285
2. 健康教育の内容は、対象の子ども達の発達に合ったものでしたか	31.20	21.42	214.50	-2.39	.017 *
3. 使った道具で子ども達の興味をとらえられていましたか	32.47	17.56	145.00	-3.65	.000 ***
4. 時間の長さは適切でしたか	30.05	23.78	257.00	-1.52	.129
5. 子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できましたか	32.77	16.03	199.50	-3.89	.000 ***
6. 声の大きさや速さは適切でしたか	34.62	14.39	88.00	-4.86	.000 ***
7. 安全面で問題はなかったですか	30.54	22.78	239.00	-2.23	.025 *
8. 子ども達は集中して聞いていましたか	30.72	21.06	208.00	-2.43	.015 *
9. 伝えたい内容は焦点化でき、子ども達に伝わりましたか	30.40	21.69	219.50	-2.13	.033 *
11. 学生はグループメンバーと協力して行えていましたか	30.45	14.25	94.50	-3.84	.005 **
12. 今後も幼稚園実習で健康教育を続けた方がよいと思いますか	33.39	14.68	96.50	-4.33	.198

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001 Mann-WhitneyのU検定 (平均ランク=順位和/nが高い方が低い方より有意に高い)

※「違う」「やや違う」「ややそう」「そう」の4件法のデータを使用

### Ⅲ. 結果

アンケートを配布した学生46名中40名から回答があり(回収率87%)、有効回答率は93%(37

名)であった。幼稚園教諭18名からは全員回答が得られた。なお、分析はアンケートの項目毎に欠損値を除外して行ったため、結果人数は項目で異なる。

表5 学生の健康教育に関する意識

質問項目	違う	やや違う	ややそうだ	そうだ
10.健康教育を通して、小児看護や子どもへの関心は高まりましたか。	2.7(1)	5.5(2)	45.9(17)	45.9(17)
11.健康教育を行ってよかったですか。	2.7(1)	8.1(3)	40.6(15)	48.6(18)
12.健康教育を通して自分の課題が見えましたか。	0(0)	13.9(5)	44.4(16)	41.7(15)
14.今後も幼稚園実習で健康教育を続けた方がよいと思いますか。	2.7(1)	8.1(3)	29.8(11)	59.4(22)
15.機会があれば、子ども達へこれからも健康教育をしたいと思いますか。	5.4(2)	8.1(3)	37.9(14)	48.6(18)

%(人数)

表6 幼稚園教諭の健康教育に関する意識

質問項目	違う	やや違う	ややそうだ	そうだ
10.健康教育によって、子ども達のテーマへの関心は高まると思いますか。	0(0)	5.6(1)	77.8(14)	16.6(3)
13.別の機会があれば、学生に健康教育をして欲しいと思いますか。	7.1(1)	21.4(3)	64.4(9)	7.1(1)
14.看護教員に保護者への健康教育を行って欲しい希望はありますか。	5.8(1)	47.1(8)	47.1(8)	0(0)
15.看護教員に幼稚園の先生方への研修を行って欲しい希望はありますか。	6.3(1)	50.0(8)	43.7(7)	0(0)

%(人数)

1. 学生と幼稚園教諭の健康教育の内容に関する回答割合(表2、3)と差の検定(表4)

1) テーマの目的や目標への合致

「1.テーマは健康教育の目的や目標に合っていましたか」という質問に対し、学生97.3%、幼稚園教諭94.1%が合っていたと回答し、学生と幼稚園教諭に有意差は見られなかった( $p=.285$ )。

2) 園児への発達に合った実施方法の工夫

園児の発達に合った健康教育を行っていたかに関する質問項目の、「2.健康教育の内容は、対象の子ども達の発達に合ったものでしたか」では、学生が94.6%、幼稚園教諭は66.7%が合ったものだったと回答し、学生と幼稚園教諭の回答に有意差が見られた( $p=.017$ )。

実施方法の質問項目では、「3.使った道具で子ども達の興味をとらえられていましたか」では、学生94.4%がとらえられたと回答したのに対し、幼稚園教諭は77.8%で、学生と幼稚園教諭に大きい差が見られた( $p<.001$ )。「4.時間の長さは適切でしたか」で「はい」と回答したのは、学生91.9%、幼稚園教諭88.9%で、学生と幼稚園教諭に差は見られなかった( $p=.129$ )。「5.子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できましたか」では、学生86.5%ができたと回答したのに対し、幼稚園教諭41.2%は過半数以上が理解しにくい言葉を使用していたと回答し、学生と幼稚園教諭に大きい差が見られた( $p<.001$ )。「6.声の大きさや速さは適切でしたか」については、学生94.6%が適切だったと回答しているが、幼稚園教諭では77.8%で、学生と幼稚園教諭に大きい差が見られた( $p<.001$ )。「8.子ども達は集中して聞いて

いましたか」では、聞いていたと回答した学生は94.4%、幼稚園教諭は88.9%で、学生と幼稚園教諭に有意差が見られた( $p<.015$ )。

3) 安全面について

健康教育を行うにあたって「7.安全面で問題はなかったですか」との質問では、学生と幼稚園教諭とも100%問題はなかったと回答した。

4) 内容の伝わりやすさ

「9.伝えたい内容は焦点化でき、子ども達に伝わりましたか」の質問に対し、伝わったと回答した学生は91.7%、幼稚園教諭は72.2%で、差が見られた( $p=.033$ )(表2、3、4)。

2. 学生と幼稚園教諭の健康教育に関する意識の回答割合(表5・6)と差の検定(表4)

1) 健康教育による園児のテーマへの関心の高まり  
幼稚園教諭への「10.健康教育によって、子ども達のテーマへの関心は高まると思いますか」の質問では、高まると回答した割合は94.4%であった。

2) 健康教育を実施した学生の子どもへの関心の高まり

学生への「10.健康教育を通して、小児看護や子どもへの関心は高まりましたか」の質問に対し、高まったと回答した割合は、91.9%であった。

3) 学生間の協力体制

「11/13.グループメンバーと協力して行っていましたか」の問いに、学生94.6%、幼稚園教諭73.3%が行っていたと回答し、学生と幼稚園教諭に差が見られた( $p=.005$ )。

4) 健康教育の継続について

「13/14.今後も幼稚園実習で健康教育を続けた方

がよいと思いますか」に対してよいと回答した割合は、学生 89.2%、幼稚園教諭 73.3%であったが、差はみられなかった(p=.198)。また、幼稚園教諭への「13.別の機会があれば、学生に健康教育をして欲しいと思いますか」の問いに対して、71.4%がして欲しいとの回答があった。学生への「15.機会があれば、子ども達へこれからも健康教育をしたいと思いますか」では、86.5%がしたいと回答した。

#### 5) 学生の健康教育への印象

「11.健康教育を行ってよかったですか」では、89.2%の学生がよかったと回答した。

#### 6) 学生の学習課題への気づき

「12.健康教育を通して自分の課題が見えましたか」に対して、86.1%の学生が気づくことがあったと回答した。

#### 7) 幼稚園教諭の健康教育へのニーズ

「14.看護教員に保護者への健康教育を行って欲しい希望はありますか」、「15.看護教員に幼稚園の先生方への研修を行って欲しい希望はありますか」では、それぞれして欲しいと回答した幼稚園教諭は、47.1%、43.7%と半数以下であった(表 5, 6)。

### 2. 健康教育についての自由記述

#### 1) 学生の自由記述について (表 7)

学生へのアンケート調査の自由記述 3 問である「子ども達への健康教育を通して気付いた課題とは何ですか。」「もっと工夫すればよかった点があれば書いてください。」「看護学生として子ども達へ行う健康教育でどのようなことを学びましたか。」には、重複するものが多数含まれていたことから、3 問の内容をまとめてカテゴリー化を行った。カテゴリー名は、<健康教育のための準備不足>、<健康教育を行う時の工夫>、<園児への対応方法>、<園児の発達に合わせた方法>についての気づきの 4 つであった(表 7)。

表7 健康教育への学生の意見 ※自由記述より抜粋

<b>1. 健康教育のための準備不足</b>
・幼稚園教諭に指導をお願いして、協力していただけたらよかった。
・初日学内日一日での準備が大変だった。もっと前から準備が必要。
・練習をもう少し重ね、スムーズに行っていればよかった。
・グループメンバーが内容を理解すること。
<b>2. 健康教育を行う時の工夫への気づき</b>
・一部だけでなく全体への質問を行うべきであった。
・一度だけでなく、何度も繰り返し行い園児におぼえてもらうようにする。
・もう少し大きい画用紙で実施すれば見やすかった。
・楽器などで子ども達の注意、興味を引くようにすればよかった。
・楽しみながらできる工夫ができればよかった。
・伝え方によって、子ども達に理解してもらえること。
<b>3. 園児への対応方法の気づき</b>
・子ども達からの質問に耳を傾け答えたらよかった。
・問いかげの際子ども達が話だし、収集がつかなかった時の対応。
・集中して聞けない子どもに注意する必要がある。
・園児の個性があることにも配慮する必要がある。
・自分自身の子どもというイメージが変わり、この年齢にはまだできないだろう、わからないだろうという固定観念がなくなり、伝える方法によってはいくつでも理解してもらえると学んだ。
<b>4. 園児の発達に合わせた方法への気づき</b>
・子ども達の理解力をもっと知る必要があった。
・理解できる言葉の範囲や物品などをもう少し勉強していればよかった。
・興味の対象や時間設定を明確にして、集中を保つ必要があった。
・子ども達の知識レベルをもっと知っておくべきだった。
・言葉づかいや話す速さなど難しかった。
・要点を簡単に園児にも伝わる言葉で説明する難しさ、本当に理解しているのか確認を取る困難さを学んだ。
・子ども達に話したそのまま入ってしまうため、情報の内容に気を付ける。
・年齢によって関わり方が全然違うこと。
・自分達が思っているよりもずっと知識が少なく、身体は血と骨だけだと思っていた様子だった。知識レベルをもっとサーチしておくべきだった。
・子ども達の年齢にあった健康教育を行うことによって、小児の発達段階に合わせた説明方法でどのようにしたら子ども達に伝わるのか考えることができた。小児病棟などで子どもに説明する際、健康教育で学んだことが生かせると思う。

#### 2) 幼稚園教諭の自由記述について (表 8)

幼稚園教諭へのアンケート調査の自由記述である「健康教育を通して気付いた学生の課題について。」「内容について、もっと工夫すればよかった点。」「看護学生が子ども達へ行う健康教育で大切にしたいこと。」の 3 問については、学生同様重複する内容が多数含まれていたため、まとめてカテゴリー化を行った。カテゴリー名は学生と同じ 4 つと「その他」の計 5 つとした。また、「学生の健康教育のテーマへの希望」についての自由記述として、「外遊びが大切ということや、転ぶ時と転ばない時がなぜあるのか、転ばないためには手をつけて守ること等運動系についてもあればよい。」という意見があった(表 8)。

表8 健康教育への幼稚園教諭の意見 ※自由記述より抜粋

1. 健康教育のための準備不足
・1番伝えたいことは何か子どもに伝わらなかった。
・目的をしっかり持って臨んでほしい。
・子どもに伝えたいことをもっと重要視して欲しい。
2. 健康教育を行う時の工夫
・見せる物は、はっきりとした線や色を使った方が見やすい。
・もう少し大きい声でした方がよかった。
・園児側から見にくいところがあった。人数に合わせた工夫が必要。
・導入で絵本や歌などで集中させてから説明に移るとよかった。
・歌詞は1フレーズずつゆっくり繰り返すとよい。
3. 園児への対応方法
・園児に問いかけるのであれば、きちんと答えて欲しい。
4. 園児の発達に合わせた方法
・対象年齢の状況や興味に合わせ、言葉や指導方法を考える。
・幼児を理解して内容を決めてほしい。
・子どもはゆっくり聞き、目からの情報をよく受け取る。
・適切な言葉遣い。
・年齢によって工夫することの大切さ。
・言葉遣い、わかりやすさ。
・文字を読むのは年長さんでも全員ではない。
5. その他
・学生全員で協力し合っていることが伝わって欲しい。
・どこに焦点を合わせて実習するのかを明確にした方がよい。
・一日の保育で行う手洗い、うがい、歯磨きなどがよい。
・外遊びの大切さ、転ぶ、転ばないの違い、転ばないために手をついて守ること等運動系についてもあればよい。

## IV. 考察

### 1. 学生と幼稚園教諭の健康教育に関する意識について

#### 1) テーマの目的や目標

「テーマは健康教育の目的や目標に合っていましたか」という質問に対し、学生と幼稚園教諭の9割以上が合っていたと回答し、両者の有意差は見られなかったことから、テーマ設定は健康教育にあっていたと考えられる。

#### 2) 園児への発達に合った実施方法の工夫

園児の発達に合った健康教育を行っていたかについての質問では、学生と幼稚園教諭での意識の差が顕著に見られた。特に大きい有意差が見られた具体的内容は、「使った道具で子ども達の興味をとらえられていましたか」、「子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できましたか」、「声の大きさや速さは適切でしたか」の発達に合った実施方法の工夫に関するものであった。学生の自由記述においても、子どもの教育方法についての理解不足に関する内容が多く書かれていたが、日々園児を指導されている幼稚園教諭の目から見た学生の、子どもの理解を促すような工夫に関する理解不足の問題は、もっと大きくとらえられていたと考えられる。

「子ども達は集中して聞いていましたか」でも、学生が幼稚園教諭より有意に聞いていたと回答した。学生は、初めての幼児への健康教育を経験し、全体の反応から子ども達が聞いてくれていたと意識して

いたが、幼稚園教諭には、子ども達の中には集中できていない子どもがおり、もっと工夫することで子ども達はより集中して聞けることが日々の実践でわかっているのではと考えられる。また、学生は、健康教育を行うことに精一杯で、子ども達の細かい状況には気付けなかったことが窺える。

「伝えたい内容は焦点化でき、子ども達に伝わりましたか」の質問でも、学生と幼稚園教諭の意識に有意差が見られた。幼稚園教諭の自由記述において、「1番伝えたいことは何か子どもに伝わらなかった。」「子どもに伝えたいことをもっと重要視して欲しい」などの意見があった。また、学生の自由記述では、「練習をもう少し重ね、スムーズに行えていればよかった。」「グループメンバーが内容を理解できていない。」「幼稚園教諭に指導をお願いして、協力していただけたらよかった。」などが挙げられていることから、内容の掘り下げ不足、練習不足などの準備不足や、子ども達のことを理解するために幼稚園教諭から助言を受ける機会確保の時間的な難しさ、適切な言葉の使用や発達に合わせた工夫のための学修不足等が内容の伝わりにくさの原因と考えられる。よって、今後、実習での子どもへの健康教育の実施時や子どもと関わる際に活かすことができる子どもの日常生活の細かい姿を知るために、より子どもの具体的なイメージを持つことができるような映像学習や、子どものいる場所に出掛け、子どもの様子に触れる観察学習などを演習授業に取り入れ、実習準備をするための時間の確保を行っていく必要があると考えられる。

#### 3) 健康教育による園児のテーマへの関心の高まり

幼稚園教諭への「健康教育によって、子ども達のテーマへの関心は高まると思いますか」の質問では、高まると回答した割合は94.4%であったことから、子ども達は興味を持って健康教育に参加し、テーマに関心を寄せている反応を見せたと幼稚園教諭は実感したと考えられる。

#### 4) 学生間の協力体制

「グループメンバーと協力して行っていましたか」の問いに、学生が幼稚園教諭より有意に行っていたと回答した。幼稚園教諭の自由記述には、「学生全員で協力し合っていることが伝わって欲しい。」「一人だけ話ができる人が進めている感じがあった。」などがあった。準備段階だけでなく実践の場面でも、学生全員が役割を持って参加するような体制が求められていたことが窺える。

### 5) 安全面について

健康教育を行うにあたっては、子ども達の安全が危惧されるような状況設定はなかったことから、安全面には問題がなかったと考えられる。これは、看護教育の中では日頃より重視している項目であり、学生にとってもより注意をして実践に臨んでいたことが窺える。

## 2. 健康教育実施による学生の子どもへの関心の高まりと理解

学生への「健康教育を通して、小児看護や子どもへの関心は高まりましたか」の質問に対し、高まったと回答した割合は高かった。学生の自由記述の中には、「子どものイメージが変わり、この年齢にはできないだろう、わからないだろうという固定観念がなくなり、伝える方法によっては何歳でも（年齢に応じた範囲で）理解してもらえると学んだ。」「要点を簡単に幼児にも伝わる言葉で説明する難しさ、本当に理解しているのか確認を取る困難さを学んだ。」とあり、教科書での学修ではわからない子どもへの理解を学生は実感できたことが窺えた。

「健康教育を行ってよかったですか」では、89.2%の学生がよかったと回答した。学生の自由記述の中に、「どう伝えればわかってもらえるかを発達段階に合わせてグループや自分で考え、実施した後も継続して行ってもらおう大切さを学んだ。同じようなことを病院実習に活かせたのでよい学びとなった。」など、健康教育での気づきを病院実習で患児に活かしたことの記述が見られた。

一方、幼稚園教諭の自由記述から、「日頃の園児を（学生が）知らないで（健康教育が）難しかったのではないか」という回答があった。学生の自由記述の「もっと興味の引くものを知るべき」「（子どもは）思っているよりも持っている知識が少ない」「簡単な言葉で説明することの難しさ」などから、日常的に園児に関わっていないと教科書の知識だけではわからないことが多く、健康教育を園児に行うことのハードルが高かったと考えられる。学生の幼稚園実習記録からは、「子ども達に関わることに不安を感じていたが、子ども達から話かけてくれたり・・信頼関係を築き始めたと感じたころに一人ひとりの個別性が見えてきて、対応や支援の仕方を考え、その子に合わせて行った。発達段階を身近で観察すると、まったく教科書通りではなく、きちんと個性を把握していくことが大切で・・看護師も一緒に、その患者に合った支援を行うためにも個性を知ることから始める必要があると感じた。」「子どもには個別性が

あり、その個別性に対して支援することが大切だと思った。」「子どもという自分自身のイメージが変わり、この年齢にはまだできないだろう、わからないだろうという固定概念がなくなり、伝える方法によってはいくつでも理解してもらえると学んだ。」などがあった。この気付きは、子どもの人権擁護のために病院で行われているプレパレーション（子どもの発達段階に合わせて病気、入院、手術などの説明を行い、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機械を与えること）にもつながるものである。学生は、園児の個別性に気付き、園児に合わせることによって理解し、上手く伝えることができる手応えを感じていることがわかる。

幼児期の子どもは、E.H.エリクソンやピアジェ、Jの理論によると、自発性、積極性、創造性を持ち新しいものへの探索行動が活発な時期である。子ども達の自ら対象に働きかける力は、親や周囲の大人との基本的信頼感を土台に発揮されるものであり、実習先幼稚園の園児達も、好奇心を持って看護学生に積極的に関わってきてくれる姿勢が見られた。幼稚園実習が始まる前には、子どもが「わからない」、わからないから「関わるのが怖い」という気持ちが学生に少なからずあったと思われるが、看護学生はこの園児からの積極的関わりに助けられ、園児に受け入れられることで、園児を見て、話して、感じ、表面的な発達の知識だけでなく「子どもの内面を理解しようとするまなざし」を持って園児と関わる経験ができ、健康教育においてもたくさんの課題に気付けたのではないかと考えられる。

このように、学生は幼稚園実習の経験から、「どう伝えればわかってもらえるか、自分自身やグループで考え、発達段階に合わせた指導の仕方をし、実施した内容をこれからも継続してもらおう大切さを学び、それを活かして小児実習（病院）でも同じようなことを行うことができたため、よい学びとなった。」などの感想を持っていた。幼稚園実習において、幼稚園教諭の日頃の園児達との関係性からくる園児の積極性に助けられ、学生は、「子どもってこういうものなんだ。」という実感を持つことができたと考えられる。そして、この学びを持って病院実習へ臨み、幼稚園実習の経験を活かして病気の患児を理解し、関わることができたり、感染予防などの健康教育を行うことができたと考えられる。

## 3. 健康教育の今後の課題

幼稚園教諭の自由記述に、「健康教育を通して、子どもに伝えたいことをもっと重要視して欲しい。」



「一番伝えたいことは何なのかが子どもに伝わらなかった。」等があり、健康教育を受ける園児のテーマへの関心が高まったとの回答は高かったものの、内容理解の保障への視点が欠けていたものが多数あることがわかった。また、学生の自由記述では、園児の発達の理解不足や準備不足が多く見られたことから、今後の幼稚園実習における健康教育の見直しが必要であることが課題として挙げられた。

学生への「健康教育を通して自分の課題が見えましたか」の問いに対して、学生は、子どもの発達、対応、理解してもらうための工夫など、たくさんの課題を自由記述へ記載し、振り返っていた。時間のない中で、健康教育を準備し初めて園児に行ったことは、学生にとって負担が大きく、達成感を味わったり、楽しかった等のポジティブな感情よりも、課題ばかりを感じるものとなってしまったように窺え、今後の指導の在り方について、教員の大きな課題となった。

健康教育に関する看護教員への幼稚園教諭のニーズに関する質問の回答では、半数以下であった。これは、現在幼稚園教諭のニーズが少ないことを示している。しかし、文部科学省は、さまざまな支援を必要としている子どものインクルーシブ教育（障がいのある子どもとない子どもが可能な限り共に学ぶ仕組み）を推進しており<sup>11)</sup>、乳幼児期からの早期の支援の必要性が盛り込まれていることから、今後、さまざまなニーズを持つ子どもの入園に際して、必要な環境整備を行うために連携の必要性があれば、協働で園児の支援を行わせていただきたいと考える。

#### 4. 小児看護教育から見た健康教育の意義

あらゆる健康レベルの子どもとその家族を対象としている小児看護学において、今回健康な園児に健康教育を行う経験が得られた学生の学びは大きかったと考える。学生は、「機会があれば、子ども達へこれからも健康教育をしたいと思いませんか」という問いに86.5%がしたいと答えている。この経験を足がかりとして、看護師として子どものあらゆる機会を捉え、子どもがセルフケア能力を獲得できるような支援を行っていくのではないかと考える。今回は、健康教育を行った後のできているかどうかの評価や継続性を支援するまでは行うことができなかった。実習期間にとらわれず、健康教育の継続や評価までを行える実習の在り方について、工夫をしていくことが今後の課題である。

## V. 結語

小児看護学実習の幼稚園実習における学生が行った健康教育に関する学生と幼稚園教諭へのアンケート調査、実習記録からの結果と今後の課題は次の通りである。

1. 学生には、時間的な制約による準備不足があり、子どもに健康教育の内容が伝わりにくい状況があったが、園児の反応から、子どもに伝える時の言葉の工夫、声の大きさ、媒体の選択など実施方法での課題に気付くことができた。
2. 園児は、興味を持って健康教育に参加し、テーマへの関心が高まった反応を見せたと学生と幼稚園教諭は感じていた。
3. 園児の発達に合った健康教育で、「使った道具で子ども達の興味をとらえていたか」「子ども達が理解しやすいやさしい言葉で説明できたか」「声の大きさや速さは適切でしたか」について、学生と幼稚園教諭の意識の差が見られた。
4. 学生は、子どもの個別性や特徴を捉え、対応方法の工夫や子どもを理解する難しさなどの課題について、振り返ることができていた。
5. 学生は、子どもに対するイメージの変化について、教科書的な知識などの固定観念がなくなり、子どもへの伝え方の工夫によって、わかりにくいことも子どもの発達に合わせて伝えることができるという体験的学びを得ていた。
6. 今後の健康教育を含めた小児看護学実習の実施に際し、子どもの発達や特徴について、より具体的にイメージできるような映像を使った学習や子どもに関するフィールドワークなど、よりよい指導体制を考えていく必要がある。

**謝辞** アンケート調査にご協力いただきました本学学生の皆様と幼稚園教諭の先生方に感謝申し上げます。また、幼稚園教諭の先生方には、実習におきまして、多大なご指導・ご助言を頂き、深謝申し上げます。

なお本研究において開示すべき利益相反はありません。

## 要旨

小児看護学実習における幼稚園実習において、学生による園児への健康教育を行った。実習終了後、学生と幼稚園教諭を対象に健康教育に関するアンケート調査を実施した。アンケートの回収率は全体で84%であった。調査項目のうち、特に子どもの発達に合った教育方法の理解に関する3項目の回答について、学生と幼稚園教諭の意識に大きい有意差が見られた。学生は、園児との関わりを通して、一人ひとりの個別性を知り、支援していくことの大切さを実感することができていた。今後、学生の子どもの理解を促進させるための授業の工夫や指導体制を考えていくことの必要性が示唆された。

## 文 献

- 1) 川名るり(研究代表者). 看護系大学におけるコアカリキュラムに応じた小児看護学教育の実習コアモデルの開発 平成25年度～平成28年度 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書. 2017.
- 2) 安田恵美子. 文献からみる小児看護学実習の現状と今後の課題 平成10年度～平成13年度科学研究費助成金研究成果報告書. 2002, 16-28.
- 3) 西田みゆき、北島靖子. 小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処 日本看護研究学会雑誌. 2005, 28(2), 59-65.
- 4) 健やか親子21 厚生労働省 HP : <http://sukoyaka21.jp/about> (2018.7.13)
- 5) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 2018.
- 6) 沼野みえ子. 子どもへの健康教育(1) -新潟市内公・私立幼稚園保育園の実施状況調査から- 人間生活学研究. 2015, 6, 125-132.
- 7) 沼野みえ子. 子どもへの健康教育(2) -授業で取り組んだ幼稚園での実践報告- 人間生活学研究. 2015, 6, 133-139.
- 8) 原田美枝子. 看護学生による保育園での健康教育の学び 神奈川歯科大学短期大学紀要. 2015, 2, 41-46.
- 9) 山岡祐衣, 田宮菜奈子, 竹下健一. 医療系学生による小児への医療理解促進・健康教育活動「ぬいぐるみ病院」の検討 小児保健研究. 2008, 58, 58-64.
- 10) 松谷美和子, 菱沼典子, 佐居由美, 他. 5歳児向けの「自分のからだを知ろう」健康教育プログラム: 消化器系の評価 聖路加看護大学紀要. 2007, 33, 48-54.
- 11) 中央教育審議会初等中等教育分科会報告. 「共生社会お形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」. 2012.